

## 口頭発表「教えて！僕らのどうぶつ先生」

—ふれ愛どうぶつ部だからできること—

3年 植村亜也 関戸結貴 田中梨絵  
2年 辻祐書 庫田清美  
1年 中田真理子 山寺福実 横尾佳織

### 1 農業クラブ“ふれ愛どうぶつ部”

資源動物科農業クラブ“ふれ愛どうぶつ部”では、ハムスター、ウサギ、モルモット、ヤギ、ポニーなど計16種類200個体以上の動物を飼養管理している。これら動物の給餌、畜舎清掃などの日常管理作業は365日交代で部員が行っている（部員数55名）。部員たちは実習や実験を通じて、様々な動物の生態的特性の理解や適正飼養技術の習得に励んでいる。同部では、前述の動物を用いて“ふれあい動物園活動”を実施している。保育園、幼稚園、小学校、中学校、盲学校、養護学校、児童福祉施設、老人介護施設、市民集会場などに動物を連れて行き、地域の方々に動物と触れ合う機会を提供している（年間活動回数：約30回、年間活動対象者数：1500人以上）。温もりある動物との触れ合いを通じて動物をより身近に感じてもらい、動物との正しいコミュニケーションのとり方、命の温かさ、命の重さを伝えることを活動日標としている。同活動は動物介在活動（A. A. A. = Animal Assisted Activity）及び動物介在教育（A. A. E. = Animal Assisted Education）として実施しており、部員の学習活動の一環として実施している。尚、全ての活動は部員主体のボランティア活動として行っている。

2003年度より動物介在教育に関する研究活動を実施している。動物介在教育とは、教育活動に動物を介在させ、“学習意欲の向上を図ること、動物を尊重する心の定着させること、命の大切さの理解させること”を目的とした活動である。同研究活動は多方面より高い評価を受けており、新聞、ラジオ、テレビなどのメディアにも度々取り上げられている。

### 2 堺市立平尾小学校との動物介在教育活動（2005年10月～現在）

前述の通り、ふれ愛どうぶつ部では2003年度より子供たちを対象とした動物介在教育に関する研究活動を実施している。しかし、2004年度までの活動は全て単発的な活動であったため、



効果的な成果をあげることができなかった。そこで、継続的な活動を展開することはできないものかと考えた。以前より交流があった堺市立平尾小学校に協力を依頼したところ、小学校2年生科目“生活科”の授業に私たちの活動を組み入れて頂けることとなった。生活科の授業は、学校と生活、家庭と生活、地域と生活、公共物や公共施設の利用、季節の変化と生活、自然や物を使った遊び、動植物の飼育・栽培、自分の成長と大きく8つの分野で構成されている。その中で“動植物飼育・栽培”という分野は授業時間全体の25%を占めている。“栽培系”の授業を行っている小学校は全体の約70%を占めているのに対して、“動物飼育系”の授業を行っている小学校はわずか約30%しかないという現状を知った（日本生活科総合的学習教育学会調べ）。これは、鳥インフルエンザ等の人獣共通感染症問題以降、小学校での動物飼育頭数が大きく減少したことと関係している。また、小学校で動物を飼養する場合、休日の管理などの負担が一部の児童及び教師に集中することも影響を及ぼしている。以上のことより、児童が命ある動物と触れ合う機会が減少しており、動物の温もりを直接感じることはできない状況にあると言える。そこで、動物との触れ合いを通じて命を伝え、児童の心を豊かにすることはできないかと考えた。命ある動物と日々向き合っている私たち農業高校生だからこそ伝えられる命が



あるのではないかと考え、次項のような活動を実施した。

2-1 2005年度活動（活動期間：2005年10月～2006年2月 活動対象：2年生児童78名）

活動日	活動内容
10月11日	農場動物見学
10月18日	動物質問会
11月1日	動物管理体験（2年1組）
12月13日	動物管理体験（2年2組）
2月7日	ふれあい動物園活動のための動物学習会
2月14日	1年生児童対象ふれあい動物園活動

2005年度における堺市立平尾小学校2年生児童を対象とした活動内容は、右表の通りである。10月11日～12月13日の活動内容の詳細については、第4回全国学校飼育動物研究大会（平成18年1月15日開催）にて発表報告を行ったので、省略する。

2006年1月、児童に今まで学んだ動物に関する知識を自分の言葉で身近な人に伝えさせれば、児童にとって良い復習の機会になると考えた。そこで、2年生児童に1年生児童を対象とした“ふれあい動物園活動”を実施させることとした。2006年2月7日、活動主体となる2年生児童が1年生児童に動物の扱い方、抱かせ方、生態的特徴などを教えられるよう動物学習会を開催した。その一週間後の2月14日にふれあい動物園活動を実施した。2年生児童は事前に自分たちで工夫を凝らしたポスターやクイズ等を作成してきた。活動中、1年生児童に分かりやすく教えようと一生懸命に取り組む姿が多々見受けられた。活動後、2年生児童に「1年生に動物のことを教えることはできましたか？」と質問したところ、多くの児童が「できた」と答え、2年生児童による1年生児童対象“ふれあい動物園活動”は成功を収めることができた。後日、1、2年生児童に動物に対する意破調査を行ったところ「あなたは動物をどう思っていますか？」との質問に1年生児童は「かわいい」という意見が半数以上を占めていたのに対し、2年生児童は「大切に育てていきたいと思う」「動物にも心や気持ちがあって人と似ていると思う」のような動物に対する愛情が感じられる意見が大部分を占める結果が得ら

れた。この意識調査結果より、今までの活動を通じて2年生児童に“動物を好きになった自分、動物を大切にしたいと思う自分”に気づかせることができた。

2-2 2006年度活動（活動期間：2006年4月～現在 活動対象：2年生児71名）

(1) 4月28日「動物を見よう、動物に触れよう」  
まず、児童を本校資源動物科農場に招待し、様々な動物を見学し、様々な動物と触れ合ってもらったこととした。児童は班単位で農場内を移動しながら、動物とのふれあいを楽しんでいた。中でも、環境エンリッチメントという視点に立って春季休業中に建設した小動物放飼場やヤギ用アスレチックは児童に大人気であった。また、私達部員が行う動物に関する説明に熱心に聞き入ってくれていた。ハムスター等の小さな動物から乳牛等の大きな動物まで、様々な動物を見学させたことにより、児童の動物に対する興味や関心を高めることができたと言える。活動中、児童は小動物放飼場を走り回るモルモットに一番興味を示し、「自分たちの教室で飼いたい！」との声を多く耳にした。児童に動物を自分たちの手で飼ってもらえれば、今まで以上に動物という存在を身近に感じてもらえるのではないかと考え、小学校の教室でモルモットをクラスペットとして飼ってもらいたいと考えた。小学校の先生もクラスでの動物飼養に興味を持っておられ、1クラスに1匹のモルモットを預けることを決定した。

(2) 5月12日「モルモットってどんな動物？」  
モルモット飼養を行う上で必要となる、生態、飼養管理方法などの知識を身に付けてもらうため学習会を開催した。授業教材として、モルモットの生態、飼養管理方法、注意点などを記載





したプリントを事前に作成し、児童に配布した。また、飼養管理方法、ブラッシングの仕方、抱き方などは児童の目の前で実演し、説明を行った。児童は自分たちのクラスで飼うモルモットの説明に熱心に聞き入っていた。私たちがモルモットの抱き方を教えると、「じゃあ、私抱っこしてみる!」「次は僕!」と児童は積極的に学習会に参加していた。また、児童から「もし、モルモットさんが逃げたら?」「ケガしちゃったら、どうすればいいの?」など、多くの質問があった。学習会終了後、児童に「モルモットさんみんなでお世話できるかな?」との質問をしたところ、「はい」と元気よく答えてくれた。このことより、児童のモルモットを飼いたいという強い意欲と自信が感じられた。

(3) 5月22日 「モルモットを自分たちで飼ってみよう」

教室にモルモットを迎え入れる日。私たちが教室に入ると児童はモルモットの元へ駆け寄り、「チョコちゃん!」「ココアちゃん!」と目を輝かせながら大歓迎していた。前回行った学習会の復習も兼ねて、児童にブラッシング、エサやり、水替え、掃除を実際に行わせたところ、「僕、ブラッシングできるで!」「モルモットさん、エサぬれたら食べへんから、水とエサはなすねんで!」などと協力し合いながら作業に取り組んでいた。また、「私もやってみよう!」と、積極的に作業に参加する児童の姿が多く見られた。この日から児童のモルモット飼養が始まった。現在、児童は皆で協力しながら日常管理を行い、休み時間になると真っ先にモルモットの所へ駆け寄るなど大切に育てている。

尚、衛生上の問題からモルモット飼養は教室に隣接したベランダで行うこととした。モルモ



ットとの接触は生活科の授業時間内のみだけでなく、休み時間等に自由に行えることとした。平日の飼養管理作業や観察は当番児童が行い、日々の様子はモルモット日記という管理日誌に記入させることとした。小学校休業日は本校にモルモットを連れて帰り、体重測定等の健康状態のチェックを部員が行うこととした。

(4) 7月14日 「モルモット飼養の感想を書いてみよう」

児童にモルモット飼養に対する感想文を書かせたところ「はじめはちょっと怖かったけど、チョコちゃんの気持ちがあがってきました。一生懸命お世話してチョコちゃんが喜んでくれたらいいです。みんなチョコちゃんのためにも頑張っています。」など、愛情が感じられる文章が多々見られた。また、児童に感想文を書かせたことにより、児童に自分の心に動物を慈しむ心が芽生えていることに気づかせることができたといえる。そして、今まで以上にモルモットは自分たちで育てないといけないという使命感や責任感を感じさせることができた。

(5) 8月4日 「日本理科教育学会第56回全国大会にて報告」

以上の活動成果を2006年8月4日に奈良県にて開催された日本理科教育学会第56回全国大会(会場：奈良教育大学)において発表報告を行ったところ、出席されていた先生方から高い評価を頂くことができた。また、様々な実践報告を聞いたことにより、今後の活動計画に大きな参考となった。

同会大会において高校生による発表報告は前例がないらしく、読売新聞に関連記事が掲載された。

(6) 11月17日 「みんなのモルモット日記を見よう」

モルモット日記の児童の記述を見ると、飼養開始直後は「かわいい」「鳴いた」等の単純な感想ばかりであったが、徐々にモルモットの特徴をつかんだ絵を描くようになり、「今日は元気がなかった」「えさを食べていなかった」等のモルモットの体調変化を気にしているような記述も見られるようになった。そこで、約5ヶ月分のモルモット日記の中からよく書けているものを数日分選抜し、児童に紹介した。その結果、児童に対して“モルモットをもっと観察したい、日記に残したい”という刺激を与えることができた。またこの頃のモルモット日記に、「チョコちゃんが寒そうです」という記述が見





られたので、冬の寒さ対策について児童と共に話し合ったところ、「(気温が低下する)夜は家に連れて帰ってあげたい」という意見が出た。担任の先生とモルモットの児童宅への連れ帰りの実施の可能性について話し合ったところ、連れ帰った際のモルモットの病気や怪我に対する対処方法が問題となった。そこで、同小学校校区に最も近い動物病院(美原獣医病院)に協力を依頼したところ、学校飼育動物として診察してもらえることとなった。児童がモルモットを連れて帰ることにより、今まで以上に児童とモルモットの絆が更に深まるのではないかと考えた。

(7) 12月6日 「おとまりモルモット計画」

モルモットの連れ帰り方法(家庭での飼養方法、保護者への説明方法等)について担任の先生と話し合った。その結果、以下のような事柄を決定した。

- ① 毎週月曜日から木曜日まで児童が交代でモルモットを自宅に連れて帰る。
- ② モルモットの様子は、保護者と一緒に“おとまり日記”に記入してもらう。
- ③ モルモットの連れ帰り時の問題点等について保護者を対象に調査し、おとまりモルモットの改善点などを見出していく

今後、児童によるモルモットの自宅への連れ帰りは、“おとまりモルモット”と名付けることとした。

(8) 12月11日 「おとまりモルモット授業」

おとまりモルモットを実施するにあたって、連れて帰る方法、児童に家での飼養管理方法等を見学説明した。なお、この日からモルモットを試験的に8日間児童に連れて帰ってもらい、保護者の意見なども取り入れ、3学期より本格的に実施していきたいと考えている。

2-3 2006年度活動における今後の課題

保護者の意見を取り入れつつ、おとまりモルモットを実施し、児童の変化等を調査していきたい。また、2008年1月26日に開催される同小学校の学校行事「平尾っ子フェスティバル」にて2年生児童が全校児童を対象にふれあい動物園活動を行うことが決定している。その際に、今までモルモット飼養を通じて自分たちが学んだことを発表する場を作りたいと考えている。そして、同小学校2年生児童及び他校2年生児童を対象としたQOL調査を行い、動物介在教育の有効性を明確にしていきたいと考えている。動物介在教育を多くの方々に知ってもらえるよう、活動の幅を広げ、生活科の授業枠を超えた様々な活動を展開していきたい。

2006年(平成18年)12月27日(水曜日) 第1版

### 飼育で伝える命

#### 児童の変化に「やりがい」

大阪府立農芸高等学校(以下「農芸高」)の生徒が、奈良市立動物園(以下「動物園」)と連携し、モルモットの飼育活動を行っている。児童は、モルモットの成長や行動を観察し、飼育日記に記入している。この活動を通じて、児童は動物への愛情や責任感を学び、自己肯定感を高めることができた。また、保護者への説明会や、地域の動物園への見学など、様々な機会を通じて、児童の関心を高め、動物介在教育の効果を最大化している。

「おとまりモルモット」は、児童が自宅に連れて帰ることで、飼育環境を整え、観察し、世話をする。この過程で、児童は動物の生態や飼育方法を学び、責任感を身に付ける。また、保護者への説明会や、地域の動物園への見学など、様々な機会を通じて、児童の関心を高め、動物介在教育の効果を最大化している。

3 まとめ

現在の小学校では、“動物”すなわち“生きた生命”を教材として授業に取り入れることは少々困難な状況にあると言える。このような状況下において、動物を扱う農業科高等学校との学校間連携は、小学校における動物介在教育活動実施の有効な手段の一つであると言える。動物介在教育に実施に協力することは、“生きた生命”を扱っている農業科高等学校の重要な使命・役割であると考えられる。

今後も小学校教諭、児童の保護者、地域の獣医師との連携を図りながら、児童の意見を取り入れつつ、活動内容をさらに飛躍させていきたいと考えている。

(大阪府立農芸高等学校)